



晩秋の夕陽記念館（母校百周年を前に）

第211号



◇ 卷頭言 ◇

若者が感じている フラットな社会

参与 藤川 隆
(昭和48年卒 函館大学特任教授)

十月三十一日に文部科学省が、来年度から函館校に「国際地域学科」を設置することを認可したとの報道がなされた。これによつて、母校で引き続き小学校の教員免許を取得することが可能となつた。このことを受けて、十一月一日付けの北海道新聞・道南版に、函館校の一年生が、「教育大で小学校教員免許がとれなくなることに違和感があつた。進路の幅が確保され、学生にとつてもうれしい」と笑顔で話していたと紹介されていたが、まさに、この言葉と笑顔のとおりである。母校に小学校教員免許の取得機能を残すために東奔西走された橋田会長はじめ、星野副学長や署名運動に尽力された「道南の教育を考える会」の役員の方々に、改めて感謝を申し上げたい。今後も函館校が、道南教育の拠点として、また、国際社会で活躍できる人材を育てる魅力ある大学としてさらに進化し続けてほしい。

さて、私は現在、大学生とかかわる仕事をさせてもらつてゐるが、その中で今多くの学生の多くのよさに気付かされている。例えば、流行や新しい情報を敏感にとらえることや、コンピュータなどを活用する技術に長けていることは言うまでもない。ボランティア活動などを通して社会参加や社会貢献をしようとする意欲が旺盛で、国際交流への関心も高い。また、素直で穏やかな学生が多いとも感じる。四十年前の学生のほとんどは、社会や生活などに不満を抱き、それを何かにぶつけながら刺々しく生きていたようだ。自分の主義・主張を貫き通そう

して、周囲との大きな摩擦が生じてしまつた。それに比べて、今の学生は実に素直で、大人しい。自己主張を強くはせずに、穏やかに誰とでも柔らかくかかわつてゐるように思われる。しかし、この素直さや穏やかさが、自分たちの夢や目標は苦難を乗り越えてでも絶対に実現しようとする覇気に欠けるという短所にも見えててしまう。ところが、筑波大学大学院の社会学の教授である土井隆義氏は、「現代の若者は、社会をフラットなものとして感じている。だから、自分だけが突出することを忌避しようとする。それは、けつして覇気を失つているわけではなく、そもそもフラットなはずの人間関係に対して、その秩序を乱すことになりかねないと感じているからだろう。(紙面の関係で要約させていただいだ。)」と述べている。

確かに、土井氏の考え方方に立つて学生の日常の言動を見直すと、とてもよく理解できる。そうであるならば、彼らに「周囲のことは気にしそぎずに、しっかりと自己主張して社会のリーダーを目指したい。」と言つても響かないのだろう。むしろ、「自分を出し過ぎずに周囲との調和を大切にして、その中で自分の考えや個性をうまく發揮しながら、みんなで社会に役立つ仕事をしよう。」と説くべきなのだろう。若者の感じ方や考え方を理解しようとはせずに、古代エジプトのパビルスにも書かれていたと言われる「今時の若い者は……」と、つい話したくなつてしまふ自分を諫める日々である。



二十六年度より新学科に

幹事長 奥崎崎敏崎之
(昭和60年卒)

十一月一日付の新聞紙上に、文部科学省の大学設置・学校法人審議会が、函館校と岩見沢校に来年度から新学科を設置することを認可したことが掲載された。平成二十三年に新学部構想が打ち出され、一時廃止が検討された小学校の教員養成機能について、その存続が明らかとなり、引き続き道南の教育を牽引する拠点として、函館校がその役割を果たし続けることとなつたことに安堵するOBや教育関係者の方々も多いことと拝察する。

この度の改組によつて、函館校は「教育部国際地域学科」となり、国際的視野と教育マインドをもち、豊かなコミュニケーション能力を發揮しながら、地域を活性化できる人材を養成するという特色をもつた学科に生まれ変わつた。

この学科はさらに二専攻に別れ、一つは定員二四〇名の「地域協働専攻」、もう一つは定員四五名の「地域教育専攻」となつた。地域協働専攻を紹介するパンフレットでは、「地域学の基本的知識と教育学的視点、並びに地域学を支える諸科学の専門知識を持ち、グローバル化した現代社会の地域学的問題を俯瞰的に捉え、国際的視野を持つ地域社会の諸問題の解決のために積極的かつ主体的に行動できる人材を養成する」とその特色を説明している。

この専攻は、さらに「国や民族・地域・文化・社会の違いを超えて、共に行動するための『協働』力を身につける」国際協働グループ(定員一〇〇名)、「地方政府や『新しい公共』を担うためのネットワーク構築力と実行力を身につける」

地域政策グループ(定員八〇名)、「地域の環境問題を解決するための科学的方法と技術を身につける」地域環境科学グループ(定員六〇名)の三つに分かれており、前身である人間地域科学課程でのこれまでの取り組みを踏まえ、「地域」と「国際」をキーワードにした取り組みを通して高等教育機関としての役割を發揮しようとしている。

また、この専攻では取得可能な資格として、社会福祉士の国家試験の受験資格など。他の、中学校と高等学校の国・社・数・理・英の教員免許が取得可能となるよう申請中のことであり、その認定について引き続き注視していくたいと思つ

るープ(定員六〇名)の三つに分かれており、前身である人間地域科学課程でのこれまでの取り組みを踏まえ、「地域」と「国際」をキーワードにした取り組みを通して高等教育機関としての役割を發揮しようとしている。

*瑞宝双光章(高齢者叙勲 7/1)
井上三郎氏 昭和22年卒
函館市本町15の4

*瑞宝双光章(高齢者叙勲 8/1)
奥谷雅雄氏 昭和20年卒
函館市五稜郭町10の19

*瑞宝双光章(高齢者叙勲 8/1)
名東陽吉氏 昭和22年卒
函館市本町20の13

*瑞宝双光章(高齢者叙勲 10/1)
水野明夫氏 昭和22年卒
七飯町鳴川5の10の18

*瑞宝双光章(高齢者叙勲 11/1)
嶺外美男氏 昭和23年卒
札幌市白石区栄通21の21の12

受章おめでとうございます

函館校の開催したフォーラムを皮切りに、地域の皆さんの署名活動、そして道南の十八市町の首長さんの「道南にも教員養成が必要だ」という力強い意見表明などがあり、この度の函館校の新学科への改組が成就した。

函館校が新学科となり、これまで以上に地域にとって必要な人材を輩し、北海道や道南にとって欠くべからざる大学となつて定立することを願つてゐる。



われ以外、皆我が師

參議院議員
森屋

(昭和55年卒)
宏

大学を卒業して三十数余年の年月が経ち、今回、思いも寄らず同窓会報への寄稿のお話をいたしました。心より皆様に感謝申し上げます。

私は特目的の能力があるわけでもなく、家としての道も、それを強く目指していなかったものではありません。ただ大きな時代の変化の中で、多くの仲間と活動してきた歩みの延長線上で今日の役割をお預かりしていると思っています。

私の信条は、全てにおいて「引き受けた以上は人と同じ事はしない」、「これにつきます。その為に出来る限り多くの人とお付き合いをするようにしています。人との出会いは宝です。自分以外の存在、たとえ幼児であっても自分に何かを与えてくれる存在あり、まさに「われ以外、皆我が師」（吉川英治）の思いです。そのことを教えてくれたのも親元を遠く離れ、四年間という時間を誰一人として知る人のいない函館の地で過ごした御陰であると正直思っています。

する年に姉は都内の私立高校へ進学し寮生活を送るようになりましたので、家では私はほとんど「一人っ子」同然、やりたい放題の我が儘な子ども時代を過ごしました。

そんな私が一人で北海道へ行くことは、家族にとつても驚きであつたと思います。高校三年の三月、卒業式も終えてからの入学試験でしたから無我夢中でした。今でも上野からの夜行列車で降りた青森駅は雪交じりの冬景色、青函連絡船乗り場へ向う人の波にまぎれてただ下を向いて雪を避けながら船に乗つたことをよく覚えてています。まさに石川さゆりの「津軽海峡冬景色」そのものでした。合格通知をいただき再び函館を訪れてからは、下宿探し、入学手手続きなどなど、今にしてもよく自分一人でできたものだと思いました。恐らく、多くの仲間達が遠く山梨からやつてきた自分を助けてくれたんだろうと思います。

函館での毎日は非常に刺激的でした。まず、私の地元山梨は周辺を山に囲まれ

そんな私が一人で北海道へ行くことは、家族にとつても驚きであつたと思います。高校三年の三月、卒業式も終えてから入学試験でしたから無我夢中でした。今でも上野からの夜行列車で降りた青森駅は雪交じりの冬景色、青函連絡船乗り場へ向う人の波にまぎれてただ下を向いて雪を避けながら船に乗つたことをよく覚えています。まさに石川さゆりの「津軽海峡冬景色」そのものでした。合格通知をいただき再び函館を訪れてからは、下宿探し、入学手手続きなどなど、今にしてもよく自分一人でできたものだと思ひます。恐らく、多くの仲間達が遠く山梨からやつてきた自分を助けてくれたんだろうと思います。

卒業後、すぐに母の創った幼稚園に就職しました。当時、男性の幼稚園教諭は珍しい存在でした。新聞などでも取り上げていただきました。そんな私に転機が訪れたのは四十歳の時でした。県会議員選挙への立候補のお話をいただいたのです。

て行つてもらつたと思います。最終学年では部長までさせていただきました。皆さんに感謝しています。

私にとりましては新天地、北海道の大地で過ごした四年間が今の自分の基礎であることは間違いありません。実は私の母は昭和四年、今の中国遼寧省大連市生まれです。戦後、山梨にやつて来ました。そんな母や近所に住む叔父達との大連での思い出話を聞きながら私は育ちま

させていただきました。そして今回、参議院議員という大きな役割を担うこととなりました。

自分のようなものが政治の世界で役割をいただき、仕事をさせていただける。このことは自分にとつては大変名譽なことであり、喜びでもあります。しかし、一方で私のようなものに地域住民の皆さんが期待を寄せていただく背景には、時代が大きな変革期を迎える人々の暮らしが

A black and white photograph showing a large group of school children sitting on the floor in rows, looking towards the camera. They are wearing dark uniforms. The background is slightly blurred, suggesting a classroom or assembly hall setting.

私の父は今注目の東京電力の技術者で、あると正直思っています。一日を三交代で水力発電所を勤める電力マンでした。元々電力会社では労働運動が盛んで、若い頃は組合活動に熱中していました。母は小学校の音楽の教師でした。十年ほどの勤務の後、自らの小さい頃からの夢であった幼稚園を私が小学校へ入学する年に開園させました。三歳年上の姉がいますが、私が中学へ入学

函館での毎日は非常に刺激的でした。まず、私の地元山梨は周辺を山に囲まれた海なし県です。ですからよく函館の姿を眺めに行きましたし、下宿からでも聞こえる船の汽笛が好きでした。また、上學での生活は楽しい事ばかりでした。集まつた仲間が良かつたのだと思います。クラスに一体感がありました。先輩の紹介で入部したハンドボール部でも皆さん良くしてもらいました。比較的経験者が多い中で素人同然の私をよく引っ張

その頃の県会議員選挙はお金も掛かりましたし、そもそも地域の名士的存在の人たちが役割を担っていましたから、市会議員もしたこともない私が選挙を戦うと言ふことは大変なことでした。二人の議席に対して五人が立候補するという激戦でした。しかし、「引き受けた以上は人と同じ事はやらない」そんな思いから、当時、地元では誰もやっていなかつたような選挙手法で戦い勝利することが出来ました。以来、十四年間県会議員を務め

これからも常に地域住民と共にある政治家を目指して努力を重ねていく所存です。今回、当選直後に橋田会長様からお祝いのお手紙をいただきなど、多くの皆様のご支援に感謝申し上げます。多くの同窓生が地域や教育の現場で努力し頑張っていると思います。そうした皆様の少しでもお役に立つことができればと思います。国会にお出でになることがありますからどうぞお寄り下さい。夕陽会の益々の御発展と皆様方の御健勝を心よりお祈り申し上げます。

函館校は2014年(平成26年)創立100周年を迎えます

1 記念式典、祝賀会、記念講演日程

日 程 平成26年6月7日（土）

会 場 函館国際ホテル

※記念講演講師は

戦場カメラマン 渡部陽一氏の予定。



2 記念環境整備事業

前庭（池周辺等）環境整備作業

学生の憩いの場である前庭が、より良い環境となるよう樹木の剪定および池周辺の整備を行う。

3 記念誌の発刊

創設時から現在までの写真等を掲載予定

これまでにも記念事業として発行しており、今回は90周年以降の内容を中心とした編集を予定。

4 記念美術展覧会

日程、会場、概要については、現在詳細に調整中

*100周年記念事業の詳細については、次号212号にて、さらに詳しくお伝えする予定です。



❖特別寄稿 ワルシャワ通信 世界の日本人学校で その1

在ポーランド日本大使館付属
ワルシャワ日本人学校長 岩 館 佳 弘
(昭和55年卒)

ポーランドといつてすぐ思い出されることは何でしょうか。きっと、ワルシャワ(条約機構)とアウシュビツ収容所の二つだらうと思います。私はポーランドの位置も正確にわからず、世界地図で確かめたほどです。

ポーランドはヨーロッパの中央に位置し、北はバルト海に面し、西にドイツ、南にチェコと国境を接しています。「平原の国」と言われるよう平原が多く山は南部にしかありません。気候・風土は北海道に非常に似ています。私の住むワルシャワ市はポーランドの首都で人口は約一七〇万人です。ワルシャワに住む日本人は約四〇〇人でポーランド全体でも一、一〇〇人程度です。

日系企業の進出も多く、トヨタ、ブリヂストン、東芝、ロッテ等を始め約二五〇社前後あるといわれています。特に、ポーランド南部の地方都市周辺に日系企業の工場があり、ワルシャワ以外の地方都市に邦人が分散しています。

ポーランド人は知日家や親日家が多く、日本文化への興味関心が高いです。日本製品への信頼も高いようです。

名門ワルシャワ大学には東洋学研究所日本学科があり、二十数倍の狭き門だと聞いています。本校の通訳もこの学科の卒業生ですが非常に正確な日本語を話します。日本製品で目に付くのは自動車です。トヨタ、ホンダ、スズキ等、日本車がたくさん走っています。

ワルシャワで有名なのは何といつても世界文化遺産である旧市街地です。第二次世界大戦でドイツ軍によってほぼ壊滅状態にされた街並みを当時の姿そのままに復元させた旧市街地は、美しさとともにポーランド人の誇りを感じさせる場所です。



ワルシャワ市・旧市街地

る時、「ジンドブレ(こんにちは)」と店員もお客様も挨拶していますし、支払い終えたら「ジンクイエバルゾ。ドヴィゼニア(どうもありがとうございます。さようなら)」と言つて別れています。

その他の生活事情を簡単に紹介します。

□住宅事情

一戸建、アパート(マンション)、テラスハウスの三種類があります。我家はテラスハウスです。縦長四階建ての建物が十戸ほどくつついています。

□飲料水事情

水道水は直接飲むことができません。

浄水器できれいにしたり飲料水を買つたりしています。(飲料水)一・五Lで五〇円、安い缶ビール(五Lで五〇円)

□交通事情

地下鉄・バス・トラム(路面電車)が走つていて便利です。タクシーも非常に安く利用できます。

□買物事情

ショッピングセンターや大型ショッピングモールがいくつかあり便利です。両替所や銀行ATMもあり助かります。また、銀行で作るデビットカードでほとんど用が足ります。

ここ数年の経済的な発展により日常生活に必要な品物はほとんど手に入ります。また、母語はポーランド語ですが英語を話すことができる人が増えてきています。

私が在外教育施設派遣教員を希望したのは次のようなことからでした。

教諭四校、教頭三校を経験し、五十才で校長にさせていただきました。その時、退職までの十一年間に思いをはせました。「やりたいことに挑戦せずに退職したくない」挑戦という言葉だけが頭の中で輝

いていたからです。

私は昭和五十五年に中学校教員養成課程(保健体育科)を卒業、続いて、教育専攻科を修了し、五十六年四月から念願の教職生活をスタートさせました。

最初の赴任地は日高管内三石町(現在、新ひだか町)の小学校でした。二校目は松前町立白神小学校。三校目からは十勝管内の小学校に今まで勤務しています。

日本人学校を希望した最初のきっかけは、マニラ日本人学校に派遣されている教員がいました。その方は、根城健先生といい、後に日高教育局指導監も歴任した方です。教職三年目の時、その根城先生が帰国し、同じ学校に戻られたのです。

初任教校にあります。当時、その学校には日本人学校の話、フィリピンの話などよく聞きましたし、理科が専門の先生になりました。教職三年目の時、その根城先生が帰国し、同じ学校に戻られたのです。

日本人学校の話、フィリピンの話などよく聞きましたし、理科が専門の先生になりました。教職三年目の時、その根城先生が帰国し、同じ学校に戻られたのです。

日本人学校の話、フィリピンの話などよく聞きましたし、理科が専門の先生になりました。教職三年目の時、その根城先生が帰国し、同じ学校に戻られたのです。

幸いなことに、十勝の夕陽会には、力

ラチ日本人学校長を歴任した田中信宏先輩、イスタンブル日本人学校長を歴任した徳成達廣先輩がいました。お二人からは励ましの言葉と選考試験を受けるに当たつての助言を随分いただきました。

二度目の挑戦で今年度の派遣が決まりましたが、年齢的に今年度派遣されなければ、もう挑戦できませんでした。

ワルシャワ日本人学校に派遣されたことを大きな喜びとし、自分が望んだとおり「挑戦」し続けていきたいと考えています。

(在籍・音更町立下士幌小学校)

Warszawa 通信

2013. 6. 28 ワルシャワ日本人学校 岩館 佳弘

6月15日、運動会終了！

学校の三大行事の一つ運動会が終わりました。
本校の運動会は日本人会との共催です。

学校のグラウンドは狭いので、20分ほど離れた
ビアセチノ運動場を席で行いました。400mトラックのある大きな運動場です。

そこに日本人学校の児童生徒17人を含めて
100名ほどの日本人会員が集まりました。

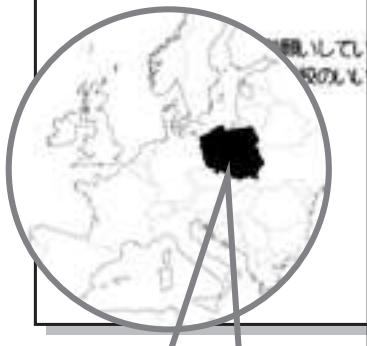


今年は小6と中学部の6名による太鼓演奏から
始まりて徒競走や玉入れ、台風の目、綱引きなど
定番の競技や親子競技の他、ヨサコイソーラン、
応援披露などが行われました。子供のやった種
目を大人だけでもやるという方式で運動会が進められました。
最後の方に、臨場感満点400mリレー（何人で走ってもよい、長崎跳び（豪華賞品が出る）など
もあり、盛り上りました。

今年は安倍総理がこの日ポーランドに来るということで、日本大使館の方が全く参加できず、例
年に比べると参加者が少なかったようです。でも、今年は、日本からの留学生チームが7人が参加
し大いに盛り上げてくれました。



【日本人会員】



「ワルシャワ生活⑦」

こんなこともありますんですね

1 安倍総理がポーランドに来ました

安倍総理大臣が6月15日にポーランドに来ました。日本の総理大臣がポーランドに来るのは10年ぶりとか。V4（ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリー）と日本の総理会談を行い、その後、G-8の会議でイギリスに行きました。

運動会終了後、ホテルで両国代表（4人）として会見に出席しました。挨拶といつても大使が紹介し握手してソーシャット写真撮影となり、始めから終わりまで3分間ぐらいため社説でした。めちゃめちゃ緊張しました。

【安倍総理夫人の前での太鼓演奏】



2 安倍総理夫人がレセプションに出席しました

英文のメールが大使館から送られてきました。なんて書いてあるんだろうと訳書に片手に読べてみると、レセプションに出席するかどうか報告してほしいなどの内容でした。日本大使館から英文で来るなんてと、英文とその内容にびっくり。当然、返答も書籍を片手に英文でメール送信しました。

このレセプションでは日本人学校の子供たちが太鼓演奏を披露しました。本当に、先日の日本祭りでの発表といいまさに「隣の舞台」でした。家族の皆さんもさぞ感激したのではないかと思います。

3 やっぱり「民族の感」

ポーランドはショパンの生まれ故郷であり、5年に一度、ショパンコンクールが開かれる街です。ショパンゆかりのある建物がたくさんありますし、旧市街に行くと石造りの表椅子がいくつもあり、美術館が開かれています。ボタンを押すとショパンの色がれてくる仕組みになっています。

そういうことで、ワルシャワにはショパン音楽大学があり十数人の日本人からの留学生がいます。ピアノを弾く人が多く、バイオリンの人は少ないようです。

高校を卒業して留学する方と大学を卒業して留学する方がいるそうで、こちらに来てからの年数もバラバラです。

左の写真はワジェンキ公園という有名な公園にある大きなショパン像です。この像のそばで日曜日の正午と午後4時から無料野外ピアノコンサートが行われています。まだ行ったことがないので、行ってみたいと思っています。



【ワジェンキ公園内のショパン像】

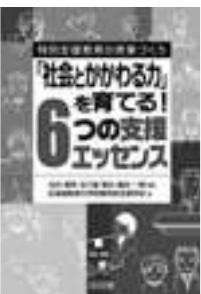
異国の香りを伝えるワルシャワ通信

教育大学函館校と連携し、これまでの研究を一冊の本にまとめ、この九月に明治図書より『社会とかかわる力』を育てる！6つの支援エッセンスとして刊行しました。これは附属特別支援学校が平成二十一年度から二十四年度まで行つてきました「主体的に社会にかかわっていく力を育む授業の創造」という研究主題を基にして行つてきた研究の成果をまとめたものです。本図書は附属特別支援学校の教員が全員で執筆を行い、表紙や文中のカットにいたるまですべて同校の教員で行いました。本をまとめにあたっては、教育大学函館校障害児臨床分野の先生方の協力を得ながら進めてきました。

本図書は特別な支援を必要とする児童生徒に対して、人間関係をどのように形成していくよいかについて、発達心理学、特別支援教育の観点からその支援のコツをエッセンスとしてまとめたものです。本の中には各エッセンスについての詳しく述べてあるほか、実際にどのようにエッセンスを取り入れていくよいかについて、実際の指導案を基にした解説がなされています。

図書内にある実践は、特別支援学校で行われた授業を基にして作成されていますが、通常級四十人学級に二～三人程度いると言われている特別な支援を必要とする子どもたちに、どのような支援を行つていくことが望ましいのかについても考えることができます。

中のイラストなども全て特別支援学校の職員が作成しました



刊行された本

北海道教育大学附属特別支援学校
TEL (〇一三八) 四六一二五一五
担当 喜屋

す。子どもたちの発達に伴う、他者とのかかわり方の変容が理論的に示されているので、子どもの発達について考える契機となる本になっています。

ぜひ、様々な学校種の先生方にご一読いただければと思います。本に関する詳しいお問い合わせは、左記へ、または直接明治図書へお願いします。

また、来年二月二十二日（土）には、本校にて「他者とのかかわり合いの中での自己が育つ授業づくり」を研究主題として公開研究協議会を開催いたします。ぜひ、ご参加ください。

**附属特別支援学校が大学と連携して図書を刊行
「社会とかかわる力」を育てる!
6つの支援エンジン**

平成26年度 北海道教育大学夕陽会 本部総会・大懇親会・全国支部長会議 のお知らせ

○ 日 時 平成26年6月21日（土）

○ 会 場 函館国際ホテル

函館市大手町5番10号 TEL 0138-23-5151

- 全国支部長会議 13時30分～15時30分
 - 総 会 16時～17時
 - 大 懇 親 会 17時30分～20時

支部の歴史を振りかえって



宗谷支部の歴史を振り返つて

宗谷支部長 島田 勇

(昭和51年卒 稚内市立稚内港小学校長)

映画「北のカナリア」で有名になつた最北の離島礼文（たくさんの観光客が訪れ、雄大で手つかずの自然に堪能されたと思いますが）その舞台となつた小規模の学校。そんな学校を多く抱え、しかも年々統廃合で学校数が減つてきていたのが今の宗谷の現状です。

利尻島・礼文島という離島へはフエリで二時間弱、陸地でも幌延には車で一時間、枝幸には車で二時間と非常に広域な中に学校が点在しており、一堂に会することが難しい状況にあります。学校の減少とともに函館の地から遠方にあつたり、昭和二十年になつても、机が窓の入りがゼロという状態も続いています。

かつては利尻・礼文から小樽への航路があり、たくさんの島の出身者が函館校に学び、宗谷の地に戻り教育への情熱を注ぎ、稚内市内の大規模校のほとんどが校長が函館出身でしめるという時もあつた事を思えば、今の現状を寂しく思わずるをえません。

今、支部会員はOBも含め、会員数四十九名（現職三十八名、OB十一名）であります。ただ、同窓会の活動への理解と協力がなかなか得られず、総会の開催でも十名弱の集まりで実施しています。

ただ、OB会員の方々の支部への期待と協力は大きく、「夕陽の灯を消さないよう」との励ましを強く受け活動への意欲を与えてくれています。

さて、宗谷での夕陽の先輩の方々のご活躍は、冊子「宗谷を翔けた夕陽健児」に記載されています。これは、大正七年卒の函師第一回生から、昭和二十九年卒の三十七年間にわたり、宗谷の地に赴任し数多くの功績を残された先輩諸氏の足跡を記録として残しておきたいという目的のもと、当時の方々に呼びかけ、昭和十七年卒の豊原洋蔵氏が中心となり回想記として平成八年に作成されたものです。

それによると、初めて夕陽卒業生が宗谷の地に第一歩を印されたのは、大正七年、函館第一回卒業生「藤江栄作氏と町田利兵衛氏」の二名であり、藤江氏は札文尋常高等小学校に、町田氏は中頓別尋常小学校に着任され教師の道をスタートさせています。

それ以降、「朔北の地宗谷こそ、我が新天地なり」「やりがいのある僻遠の地宗谷へ」と、奮つて宗谷の地に赴任する卒業生が増え、多いときには百名を超える会員数があつたとも記されています。当時は、「稚内支部」と「宗谷支部」とが分かれてあつたようですが、会員の

減少に伴い、発展的に統合され、現在の夕陽会宗谷支部となつたのです。それでも今もそうですが、宗谷の地に赴任された方、数年で宗谷の地を離れる方が多く、宗谷の地で退職まで奮闘される方は少なかつたとも記されています。

冊子の中の回想によれば、昭和十七年に着任された際に、「赴任地の学校に行くのに、馬そりで十三キロの道のりをたどり、船酔いではなく馬そり酔いした思い出があつたり、電気がなくランプ生活であつたり、昭和二十年になつても、机がなくみかん箱が机代わりだった。島へはフェリーで四時間半もの時間がかかりました。」と当時の生活の大変さ、不便さが語られ、言葉に絶する苦難や苦闘の連續であったと想像されます。でも、そんな苦しさの中にあつても、「教育の原点は、僻地にあり」という熱い想いと、函館師範の校は「土地墾闢・人民蕃殖」の教えを貫き、開拓精神に燃え、宗谷の教育の発展に貢献された先輩諸氏の功績は、本当に偉大なものがあると尊敬の念にたえません。先輩諸氏の残された「函師スピリット」をしつかりと受け継ぐとともに、これからの宗谷の教育につなげていく義務と責任を痛感いたします。

さて、近年の支部の活動について触れたいと思います。年に一度の総会の他に、「上川・留萌との三支部の役員による交流」を隔年で実施しております。開催地も持ち回りで行い、それぞれの支部の現状や悩みなどを交流し親睦を深めております。それぞれの支部の課題には、ともに函館から遠方にあり共通するものが多く、打開するための各支部の工夫を学ぶ

機会となっています。

宗谷支部の活動では、会員は減少の一途ですが、何とか会員相互の絆を深め、それぞれの職場が広域に位置するため、一堂に会する事が難しいのですが、年に一度の総会の他に、対象となる方が居られる場合には、送別会や勇退感謝会を開催し長年の労をねぎらう機会としています。

宗谷は若手の会員が多く、中堅が少ないという現実があります。初任から僻地複式の学校となり、相談相手も少なく、寂しく不安の日々を過ごしている会員も少なくありません。そんな不安を解消し、連帯を深めていくことが支部の大きな課題と考えております。その取り組みの一環として、支部情報を年三回程度発行し、本部や支部の現況の情報を探すことでも会員へのつながりを深めております。会員の減少・同窓会意識の希薄化など、課題は大きいのですが、「創造し行動する夕陽会」の意義をしつかりと踏まえ、さらなる宗谷支部の発展のために奮闘していきたいと思います。

最後になりますが、宗谷支部の歴史の振り返りにあたって、先輩諸氏の多年にわたる苦闘の末に築き上げて来られた功績の数々に触れる機会を与えていただき、あらためてつなげていくものとして「夕陽の灯」をしつかりと守つていく決意と責任を喚起していただいたことに対してもお礼を申し上げます。



笑顔で子ども達の支援にあたる鈴木さん



北海道教育大学函館校と函館市教育委員会は、今年度より、連携協力事業として「教育支援ボランティア」事業を展開し、希望のあった近隣の小・中学校・幼稚園、高等学校に「教育支援ボランティア」の学生を派遣しています。

この事業は、週一回程度、特別支援教育の指導補助や通常学級の授業等の学習支援のために希望のあった学生を派遣するものです。

教職を希望する学生にとっては、単に講義だけでなく、実際に学校現場での指導に参加することで、児童生徒への理解が深まり、将来、教員となるための心構えもできると好評です。

この事業は、週一回程度、特別支援教育の指導補助や通常学級の授業等の学習支援のために希望のあった学生を派遣す

また学校現場にとつても、指導の個別化が図られたり、教員の補助として期待がもたれています。

本校（函館市立北昭和小学校）では、二年生の学生が配属され、毎週木曜日に、様々な学年に入り、児童の学習支援、教師の授業補助に活躍しています。以下、配属された学生の声を掲載しました。

函館校「教育支援ボランティア」活躍中

校」というものがどういうものなのか生で感じたいと強く思つたからです。私は将来、教員になるために教育大学へ通っています。来年には教育実習が待っており、教育実習の事前指導というのも行われています。しかし、私自身もも行わっています。しかし、私自身の小学生や中学生にふれる機会はほとんどなく、今の「学校」「子どもたち」というのも学校の講義で聴いただけの文字だけのものになっていました。

そこで、私は学校というものの中に直に入り、子ども達、先生方、学校というのにふれ、講義ではわからない多くのことを吸収し学びたいと強く思いこのボランティアに応募し参加しました。

実際に現場に入つてみると、今まで見えてこなかつたものが少しずつですが見えてくるようになりました。子ども達の様子も、ボランティアに来る前には、うまく想像できずにいましたが、子ども達というのは本当に元気で、私たちに多くのことを教えてくれるのだとも感じました。

担任の先生と子ども達が、とても強い信頼関係で結ばれていることも授業を見ていると、とてもよくわかりました。子ども達と先生とのやりとりの一つ一つがとても温かみのあるもので、私も「いうう先生になりたいな」と強く思いました。子ども達や先生方と関わっていく中で、教師という職に対する魅力をこれまでにないほど感じています。

教育支援ボランティアを始めて二ヶ月ほど経ちましたが、残りの期間、少しでも多くのことを学べるように積極的に関わっていきたいです。このような機会を与えてください、本当にありがとうございます。

母校近景



支部だより

今年度の総会で第二十七代支部長を仰せつかりました。その総会において、これまでの基本方針である「母校開学の精神を確かめ、夕陽会の原点である親睦の和を深めるとともに、教育振興に寄与する」を継承していくことを承認していました。渡島支部は夕陽会の中核支部として、本部と一緒に諸先輩会員が當々として築きあげてきた実績をしっかりと継承しつつ、次に繋ぐことができるように支部役員と一緒に力を尽くしております。また、年々減少傾向にあります現職会員五百名を数え、函館市を除いた教職員数の半数を占める同窓会もあります。さらに、市町ごとに支会が組織され総会懇親会が行われ親睦交流が図られております。

さて、開学以来、教員養成を目的とした大学として、師範学校・学芸大・教育大と続いてきた函館校も時代の趨勢とともに変わってきたものの、今回、小学校教員養成機能は存続されることになり大変嬉しく思っています。

教育大学と称するからには教職を目指し、入学してくるものだと思います。我々の世代ではそうでした。ある大学の先生が「この世には二つの聖職がある」と言っています。それぞれ「命を奪つて良い人」、「体を傷つけて良い人」そして「魂に手を触れる人」です。それぞれの職業の名前は「裁判官、医師、教師」であります。「これらの人たちが本来

が當々として築きあげてきた実績をしっかりと継承しつつ、次に繋ぐことができるように支部役員と一緒に力を尽くしております。また、年々減少傾向にあります現職会員五百名を数え、函館市を除いた教職員数の半数を占める同窓会もあります。さらに、市町ごとに支会が組織され総会懇親会が行われ親睦交流が図られております。

さて、開学以来、教員養成を目的とした大学として、師範学校・学芸大・教育大と続いてきた函館校も時代の趨勢とともに変わってきたものの、今回、小学校教員養成機能は存続されることになり大変嬉しく思っています。

教育大学と称するからには教職を目指し、入学してくるものだと思います。我々の世代ではそうでした。ある大学の先生が「この世には二つの聖職がある」と言っています。それぞれ「命を奪つて良い人」、「体を傷つけて良い人」そして「魂に手を触れる人」です。それぞれの職業の名前は「裁判官、医師、教師」であります。「これらの人たちが本来



渡島支部だより

(昭和53年卒
福島町立福島中学校長)

鈴木牧男

なら人間にできないことをしなければならないのは、社会に犯人、病人、子どもがいるからに他ならない。」とも述べています。この道南圏でこの三つの聖職の一つに教職を育成する大学は、教育大学函館校のみです。残念ながら、裁判官や医師を育てる大学は道南にはありません。

教職が、聖職かは異論がありますが、諸先輩はこの渡島の地で、どんなに時代が変わろうと、その都度子どもたちの学びと心豊かな人間形成のために、前向きに日々ご苦労を重ねられてきました。地域とともに人を育て、はぐくんできた功績は大であります。その土地に住み、子どもを育てはぐくみ、子どもの夢・地域の夢を語り合う。その土地の気候風土歴史、そして、その土地にあつた教育。「地元の大学」を出した「地元の名物先生」が「地元のわらしやんど」を育てる姿は、母校の、そしてこの渡島の夕陽会員のあるべき姿であります。

「不易と流行」ではないですが、時代の趨勢とともに変わる母校の根底に息づいている建学の精神「土地墾闢・人民蕃殖」はこれからも引き継がれ、夕陽会の支えとして生き続けて行くものと思います。

本部方針「創造し行動する夕陽会」を基に、渡島支部でも原点である親睦の和を深めるとともに、教育の振興に寄与することを念頭に、支部と支会の連携強化、会員の資質向上を図る事業推進を進めております。

このような気持ちになるまでには時間かかりましたし、たくさんの葛藤や悩みもありました。その都度、現在勤めている学校の先生方や指導教官の先生、臨時でお世話になっていた学校の先生方に



日々挑戦、日々感謝

(平成24年卒
函館市立北昭和小学校教諭)

加藤慈子

相談し、たくさんのアドバイスをいただきました。離れて住む家族も厳しくも温かく私に接してくれ、いつも笑顔で過ごすための活力をくれました。たくさんの人に支えていただいているおかげで今

た、だいてから、半年以上が経ちました。少しずつ子どもたちの実態が見え始めてきたなと感じています。子どもたちは、日によって時間によって気分は如何様にも変化するため、一時間目にまずまずと思つて行つた指導が、次の時間は全く取り組まない、ということもしばしばあります。

しかし、その都度記録をつけて振り返つてみると、大体の傾向がつかめてきました。

子どもと過ごす毎日は楽しいのですが、時々難しいなと思う時もあります。様々なアプローチをしていくことにやりがいを感じています。これからも、子どもたちが生活の中で困つたりつまずいたりしてしまったときに、授業や普段の関わりの中で手立てをうち、毎日を笑顔で過ごせる時間を多く作つていければうれしいと思います。

いつか今学んでいることを自分の力と不足を痛感するとともに、学んだことを勉強する機会を多く作っています。勉強会に参加するたびにいろいろな先生方に出会い、多くのことを教えていただき、たいへん勉強になります。私の知らないことがまだまだたくさんあることに勉強のだろうと思うと面白さを感じます。

子どもたちに実践したらどんな顔をするのだろうと思うと面白さを感じます。

悩みはたくさんありますが、子どもたち一人一人が輝く毎日を送れるよう、日々努力し挑戦し続けてまいりたいと思います。

夕陽会の諸先輩方には、大学、期限付

き時にも大変お世話になりましたが、今後ともご指導の程、よろしくお願ひ致します。

教壇で活躍する若き夕陽教師たち

前納会費納入会員名簿追加分

(平成二十五年十二月二日現在)

夕陽会員訃報

狩野武雄	首都圈	昭49
瀬戸利通氏	昭33	
小樽市幸4の28の8		
渡辺正氏	昭20	
三郷市彦成4の5の9の206		
高嶋勉氏	昭12	
函館市鍛冶2の15の7		
澤田満氏	昭28	
札幌市西区西野1の2の4の1		
岡部一穂氏	昭22	
美唄市光珠内町416の14		
瀧沢房美氏	昭24	
函館市田家町6の14		
岩崎彌氏	昭16	
白老町字北吉原469の88		
相澤玄二氏	昭27	
森町字御幸町3の1		
上原孝一氏	昭34	
函館市鍛冶1の49の23		
大坂(辻)公子氏	昭43	
函館市柏木町4の24		
良平氏	昭28	
佑子氏	昭25	
文子氏	昭25	
小野(木村)専一氏	昭17	
森町字上台町307		
(平成二十五年十二月二日現在)		



前納会費制度ご利用のお勧め	
夕陽会本部通常会費の納入には、前納会費制度があります。「退職された方は是非、この制度をご利用くださるようお勧めいたします。	前納会費納入会員は、会員名簿に納入者の○印を付して終身会員として、次のような特典が受けられます。
①記念品(人民養殖の白扇)の贈呈	その他不定期発行の記念品等の贈呈
②夕陽会報(年三回発行)と会員名簿(三年に一度の発行)の本人への贈呈	③前納会員への加入切り替えを会報に通知掲載、その他慶弔規定の適用
④昭和年代の卒業生までの退職者	前納会費の額は、卒業年次により次の四段階になつております。
⑤大正年代の卒業生	①大正年代の卒業生 五千円
⑥昭和五十一年以降の退職者	②昭和年代の卒業生のうち昭和五十年までの退職者 一万円
⑦同じく昭和五十一年以降の退職者	③同じく昭和五十一年以降の退職者 二万円
⑧平成元年以降の退職者	④平成元年以降の退職者 三万円

ご希望の方は、本部(附属小学校内財政部担当)へご一報ください。振替用紙を送付いたしますので、簡単に手続きが済みます。
なお、函館市支部と渡島支部でも支部終身会員制度をとり、その推進・拡充を図っております。両支部とも終身会費は一万円であり、それぞれ特典があります。

本部事務局へのご連絡などは、次の所へお願いいたします。
(情宣部長 古川 邦彦 記 昭56卒)
北海道教育大学附属函館小学校内
夕陽会本部事務局
電話番号 (0138) 46-2235
夕陽会専用 (0138) 34-5520
FAX番号 (0138) 47-7376

- ◆会報第二二一号をお届けいたします。今回も、皆様から多くの玉稿や貴重な写真等をお寄せいただきました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。
- ◆今号の表紙は来年百周年を迎える函館校の夕陽記念館の晚秋の風景です。
- ◆函館校の新学部構想も、教員養成機能を残したまま新学科への移行が決まり、二十六年度からスタートします。これからも「道南の教育を担う大学」として函館校をサポートしていくことが大切かと思います。
- ◆昭和五十五年卒の岩館氏からは、毎月Eメールで遠くワルシャワから「学校通信」が届いています。
- ◆ぜひ掲載してほしい情報・取材してほしい題材等、どしどし本部事務局や情宣部にお知らせください。お待ちしています。

